本化題目宗創唱の佛教史的意義

高田惠忍

佛滅後二千百七十一年、末法に入つてより一百七十一年に當り、吾祖日蓮聖人（AD1222—1282）は本化上行の自覺に立ち、本門壽量品立脚の人格主義的法華經觀を一題目に歸納せしめたる題目宗を建立し給ふた。然るにその動機を以て彼の淨土宗の開祖法然（AD1133—1212）の寂後僅に四十一年にして立教開宗せし年代的接近や、その立教の形式の念佛宗に對する題目宗という如き類似より、又立正安國論（御遺文三七八）その他佐前の祖書中屢〻法然を論議する等より推論して、尅して彼と對立的に此題目宗を興立せし如く想う者決して鮮しとせぬ。

吾日蓮聖人の立教開宗は、然るに、是の如き淺薄なる對立觀より起つたものではない。予は玆に聖人獨特の法華經及法華本門の信仰に根基する昔迹本三重配當に立つ三國佛教史觀の上より、今一つは法然と共に同じく叡岳より崛起せるこの二大事實より題目宗を當然創唱せざるを得なかつた、それが

偶々その內容は兎に角、念佛宗に對する題目宗、佛寶宗に對する法寶宗の對立が教界に現出せしに過ぎざることを述べやうと想うのである。要するに彼れの口吻を眞似たとか、對抗的の意味でなく、右二点より當然唱道せざるを得ずして唱道せし聖祖の獨創的唱道たることを明にしたいと想ふのみ。卽ち消極的、模倣的ならずして、積極的、獨創的動機に由來することを明にすれば事足るのである。

凡そ聖祖一代の主張は飽くまで破邪顯正より外にはない。天台傳教を以て法華傳燈の先師として推載する場合は、昔經及昔經導師を破拆する權實判の日に於て之を加担人とするが、その本門本覺に立脚して、彼れの迹門始覺に過ぎざることを道破して、本化の自覺を叫ぶ本迹判の日に於ては、敢然として彼等を目して迹化といひ、その教法を指して去暦昨食と言ひ放つてゐる。以て題目宗の顯正の外は凡て古今の佛教諸家に對して破邪的批判の立場を取りしことを認むべきである。故に遺文全篇題目宗の創唱の外は盡く他宗、他教に對する破邪的批判のみ。從て遺文全篇は題目宗の立場に立つ他宗批判の外何物もない。それが徹頭徹尾絕對拆伏主義に立つことは如何にしても見逃すべからざる特色といはねばならぬ。この絕對拆伏主義がその根本精神にして、攝受、拆伏時に適ふとはその悉坦的方便に過ぎざることを曾て强調されたる本化攝拆論の著者田中居士の鑑識を偉なりとせざるを得ぬ。又久しく日蓮主義の何たるを究めず、復究めんとせざりし村上博士の、一朝之を究めて、『親鸞日蓮兩聖人

に就て』を彼の哲學雜誌上に公開さるゝに於て、日蓮の教義と他宗教義とは根本的に相容れざるものであつて、日蓮を容れゝば他宗立たず、他宗を容れゝば日蓮が相立たぬことになるといはれたのは、さすがに博士もその絶對拆伏主義の片鱗を認めたればこそ、この驚異の語を發せられしに相違ない。是蓋し天台の謂ゆる『若し餘經を弘むるに教相を明さゞるは、義に於て傷ることなし、若し法華を弘むるに教相を明さゞるは文義缺くることあり。』(玄義釋籤會本十ノ上一紙右)の法華宗由來の傳統的精神の然らしむる所である。況や聖祖の教義たる『今日蓮が弘通する法門はせばきやうなれども甚だ深し。其の故は彼の天台傳教等の所弘の法よりは一重立ち入りたる故也。』(四條金吾殿御返事八五二)に於てをや。是れ屢々本化大法を弘むるの士の特に一代聖教に通達し、八宗の章疏を習學すべき(曾谷入道許御書二一一二)を勸誡し給ふ所以でなくてはならない。かくして本化宗學に沈潛する漸く久しうして、遂に題目の深義に參到し、徹底し得ると共に、佛教諸家の學に自ら通達し得るの得がある。是れ先師中、行學朝師、中興三師、啓蒙講師、綱要導師、優陀那輝師等が本化大法題目の幽義を得たりしと共に、佛教諸家の學に造詣するに於て精核なりし所以にあらざるを得んやである。是れ吾人の大に宗學に深く造詣すべきを現代に絶叫する次第である。實に吾宗に於ては宗學を擱いて佛教諸家學に走らずとも、宗學に沒頭日漸く久しうして、いつしか自ら他宗學に通達し得るの得がある。吾家の學徒たる者宜しく茲

に猛省一番すべきである。

さて然らば正しく吾祖の佛教史觀果して如何。吾大聖人の佛教史觀は大悲經、善見律に明されたる正像末三時觀の上に、法華經迹本二門開顯の要旨たる昔迹本三重配當の次第に依るのである。(大集經には三時を開いて五ケ五百歳を說いてある、共に聖祖の依る所である。)正法佛教とは、佛滅後一百年大天(BC300ab.)の出世により、小乘教中上座部、大衆部の對立を生じ、滅後百年より二三百年の間に於て本末二十部の分裂となり、乃至六百年の馬鳴(AD50ab.—)以後大乘教興隆し、七百年の龍樹(AD200ab.—)提婆(AD200ab.)九百年の無著(AD450ab.—)世親(AD420ab.—)以后蘭菊相競う那蘭陀教學の最盛期を現出し、此れより譯經の三藏陸續支那に渡來して經論を傳譯せし時代を總稱してかくいうのである。是れ三重配當に於て昔經流布の時代というべきである。卽ち佛滅後約千年を以て正法佛教、昔教時代とするのである。次に像法佛教とは如何。支那陳隋の代に出世せる天台(AD538—597)以前の南三北七十家及び光宅寺法雲(AD467—529)の涅槃宗より天台の法華宗、賢首(AD643—712)の華嚴宗、嘉祥(AD549—623)の三論宗、慈恩(AD632—682)の法相宗、善無畏(AD637—735)不空(AD705—774)金剛智(AD662—732)三三藏の眞言宗、達磨(AD379—528)の禪宗、善導(AD613—681)の淨土宗、道宣(AD596—667)の律宗等陳隋の頃より唐朝の末に至るまでの教判佛教興隆時代を以て像法佛教の前期とすべきである。勿論

この時代にも羅什(AD340—413)の代表する舊譯の譯風より玄奘(AD600—664)の代表する新譯の譯風に轉換する傳譯の史實も認むべきだが、その主潮は教判佛教にあつた。然してその中に於て、天台を以て震丹の小釋迦と稱するに見ても、又その教判の組織の廣大にして、横縱兼ね備はり、部に約し、教に約し到れり盡せるに於て第一等を許すものは、その天台の人物の偉なるに依るは勿論なるも、その所依教典の諸經中王法華に依りしが故ならずんばあらず。實に天台は當時教判佛教界の王者として駕御せし概なきを得ない。吾日蓮聖人の見解に依れば像法佛教を以て法華迹門流布の時代となし、諸他の一切諸宗は實は正法時代にこそ要あれ、今の要に非ずとなすのである。いはゞ諸他の宗師はあれども天台の光に奪はれて少在屬無に歸するの格のみ。次に本朝に至りては、奈良六宗も平安初期の傳教(AD767—822)出世の爲めの前梯にすぎず、同時代の弘法(AD774—835)の眞言宗も、下りて榮西(AD1141—1215)大日等の禪宗も、法然(AD1133—1212)の念佛宗も要するに正法佛教の殘輝のみ。叡岳に起りし慈覺(AD794—864)智証(AD814—891)安然(AD877ab.)惠心(AD942—1017)の佛教さへ天台末學としてその權實雜亂を糺彈して已まず。況や弘法、榮西、法然の佛教をや。日本佛教の過去に於ける唯傳教あるのみ。念禪の如き吾祖の眼中僅に『いうに甲斐なき禪宗淨土宗』(開目鈔七五四) に過ぎなかつたのである。傳教を中心とする此等の像法佛教之をその后期となす。而もその中心は法華經迹

門の佛教にありて、諸他の佛教はこれ又正法の要であつて、今の要にあらず。宜なる哉傳教の叡山佛教の背景を以て佛教大學視することに於て自他の共許することや。かくして吾祖は滅後千年後の像法佛教を以て法華經迹門の佛教となしたのである。次に末法の佛教とは如何。末法とは滅后二千年の佛教であつて、實には榮西、法然の出世はすでに末法に入てゐるのである。法然に就いては遺文中到る處に之を論議し、大日道隆等といへど榮西についていはず、通漫に禪念二宗の徒をいうものは法然榮西の末流をいうのに外ならぬ。更にまた道元(AD1200—1253)親鸞(AD1168—1262)に就てはその出世ほゞ同時代なるを以て特に指摘していはざれど、惟うに『いうにかひなき禪宗淨土宗』の中にこもれりと見るべきであらう。この末法の佛教を以て吾祖は法華經本門の佛教となし、末法の時代に於ては天台傳教の像法佛教、迹門佛教なほ且去曆昨食と拒排したのである。況や正法の要なる南都六宗や、眞言や、禪念をや。その己を逞うするものたゞ殘輝の餘光のみ。この信念に立つが故に、題目宗、本化妙宗の旗印を高揚すると共に『法華拆伏破權門理』(如說修行鈔九六八)の利劍を振はざるを得なかつたのである。

三國佛教史觀に於て吾祖の眼中正法佛教に於て龍樹、天親あり、像法佛教に於て天台傳教ありしのみ。それも嚴密にいふ時、釋尊、天台、傳教、日蓮と次第し、これを以て三國四師と稱しその次第を

外相承となしてゐる。（報恩鈔一四七九、何れも釋尊天台傳教を出し法華行者値難事一〇二四—本尊鈔九三六、一〇二五顯佛未來記九七八、共に三國四師を擧ぐ）是れ三國佛教史上法華傳燈の師として天台傳教を數へ、むしろ昔教導師拆伏の加担人となしたのであつたが、末法佛教弘通の任に堪へ得る者誰ぞやを斷定するに至りては、本化上行の自覺に立ち曾て神力品塔中に於て本佛釋尊より四句に結要されたる妙法五字を末法に弘宣すべき別囑を與へられし大自覺に立ち、その相承に於ける、本佛釋尊、本化上行、日蓮の次第なるを述べて、之を內証眞實直授の相承となした。（觀心本尊鈔に先だつ二ヶ月の著法華宗內証佛法血脈九一七に之を發表してある。）是れ末法佛教として法華經本門の本法題目宗建立流布の日は天台傳教も尙ほ迹化總付の士にすぎず、從つてその教法も去曆昨食のみとなす。迹化すでに然り況や天台末學をや。昔教導師弘法、榮西、法然の徒をや。況や復た彼等の末流をや。末法唯一の導師は唯吾祖日蓮聖人あるのみ。末法唯一の教は妙法七字宗教あるのみ。大曼荼羅あるのみ。題目宗あるのみ。かゝる結論は實に昔迹本三重配當に立つ吾祖獨特の三國佛教史觀より斷乎截然として之を論斷されたのであつた。右は開目、本尊、撰時、報恩諸鈔の說意に從つて之を論述したのであつて、決して吾人の胸臆に出づるに非ず。

次に同じく當年の教傑法然、日蓮を輩出せる比叡山上の芽圍氣より之を論述して見たいと想ふ。實に比叡山は山それ自らが過去に於ける日本佛教を事理二面に於て統一しつゝあり、從つて開祖傳教に

佛教的王者の風格あるを想はしむる程それ程日本綜合佛教大學の觀があつた。この山には傳教より以后に於て叡山佛教を實際化し、時代相應宗たらしめんとする二次三次の思想運動が起つた。その第一次は慈覺、智証の圓密混淆のそれなる理同事別、理同事勝の論であつた。その第二次は安然の密教の上に更に禪を加へたる密禪勝法華の論であつた。その第三次は空也(AD903—972)の踊躍念佛及び聖應大師良忍(AD1072—1132)の融通念佛であつた。何れもこの二者は止觀の觀心念佛を實際化したものであつた。その第四次は前に述べたる如く惠心院の源信(AD942—1017)であつて、その本覺法門に於て殆ど吾祖の壘を磨する程度に進ましめて、而も茲に實際化を得ずして彌陀法に走り、その著觀心念佛論に於ては止觀の念佛に止まり、往生要集に於ては口唱念佛に進める如き兩楹處中の念佛を主張したのであつた。而も傳教が獨り法華を宗とせるその開祖の眞意を汲みて實際化せしもの曾て一人もあらず、たゞ源信を頭目とする惠心流の二三子が本覺法門を發揮せるやよし、而も權教彌陀法に墮落せるを如何。その他何れも權實雜亂の大過あるを如何せん。この時に當り、同じく叡岳に學べるにかゝはらず榮西は全然叡山佛教と無關係なる南宗禪臨濟禪の法幢樹立に進み、法然また曾て三塔の學班に列りて智慧第一法然房と稱せられしにかゝはらず、これ又叡山佛教と無關係にある善導流の口唱念佛の創立に直進せるは、唯時代相應宗を開けることは許し得るが、叡山佛法には何等の消長なしといはね

ばならぬ。然るに吾祖日蓮聖人は天台に出家して天台傳敎の章疏に造詣する所特に深く。曾ては天台傳敎の衣鉢を繼ぎ特に叡山佛法の正統復古を理想して彼の雜亂天台の革新に向つて萬丈の氣焰を擧ぐると共に、權敎諸師を拆伏するに於て完膚なからしめ、更に百尺竿頭に一歩を進めては同じく傳敎と共に法華經を宗としつゝ、傳敎の曾て手をつけざりし(付囑にあらず、その人にあらず、その任にあらざりし故に著手せざりし也)本門壽量品立脚の題目宗光顯に進一轉、以て末法佛敎の基礎を築くべきは太だ當然の事といはねばならぬ。之をこれ本化の色讀といひ、本法の樹立といふのであつて法華經王是に於て初めてその到着すべき處に到達してよく經王の經王たる眞價を發揮せりといはねばならぬ。豈法然の佛敎の傍系的敎義念佛敎樹立の比ならんや。正に佛敎正系の最后的發揮を得たるもの、吾本化題目宗ならざるを得んやである。以上二面觀に於て、吾人は吾祖の本化妙宗題目宗の正統なる史的地位を明にし得たと信ずる。既に見たる如く吾祖題目宗唱道の對他的方面には他宗判と天台判の二方面がある。他宗判とは、法華經迹本二門の開顯諸法實相、久遠實成の二ヶ大事を提さげて他宗に臨み、他宗を比判したる權實判をいうのである。天台判とは迹門立脚の法華宗を弘むる天台、傳敎に對し、本門立脚の法華宗題目宗の優越を以て臨み、彼を批判し去る本迹判の謂である。吾祖が題目宗の旗印を高揚して當年の敎界に臨むの日。必ずや權實判、本迹判の二大利劍を振はざることはなかつたのである。卽ち聖祖

が題目宗を高揚して進むの時、同じく法華經弘通の先人天台、傳教に對してすら慊焉をいだく、況や權教諸師をやの謂のみ。本化題目宗宣揚の對他的方面は實に是の如き絶對拆伏主義に立つことを返す〳〵も銘記することを要するのである。既に題目宗の對他的方面の破邪にあり、絶對拆伏主義にあることを檢した。然らば次にその顯正的方面は如何、請う端を改めて之を述ぶるとしやう。

右の一篇は近く公刊さるゝ豫定なる『日蓮宗の安心』中、第五章題目宗の一部分である。是れ刪者壽師の所謂 發二腐囊一分二布大方一もの若ハ香若ハ臭予自ら知らざる所である。時に昭和五年晩秋祖山東溪學寮の一室にて之を記述以て棲神記者の机右に致すものである。